

# あぜ道情報第2号

## (中干し～追肥)

### 1 気象経過と予報、生育状況

#### (1) 気象経過 (5月1日(月)～6月11日(日))

気温：5月は4半旬を除き平年より気温が高く経過している。6月に入ってから平年より高く経過している。  
降水量：5月は4半旬に降雨があったものの、平年より降水量は少なく経過している。6月は平年より多く経過している。  
日照時間：5月は1半旬と4半旬を除き多照に経過している。6月に入ってから多照に経過している。

#### (2) 東北地方3か月予報 (平成29年5月24日 仙台管区气象台発表)

6月 期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。  
7月 平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。  
8月 東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。

### 2 生育状況

- 5月が高温多照に経過し、活着は良好であった。
- 6月10日現在のいわき市平坦部の生育は、前年より草丈はやや短く、分げつの発生は順調で茎数は多くなっている。葉数からみた生育ステージは前年とほぼ同じとみられる。

(主要品目の生育目標 いわき平坦)

品種	目標時期	草丈 cm
コシヒカリ	7月 5日	50～55
	幼穂形成期	65～70
ひとめぼれ	7月 5日	50 前後
	幼穂形成期	60～65
天のつぶ	7月 5日	50 前後
	幼穂形成期	60～65

### 3 今後の管理対策

#### (1) 中干しの実施 「倒伏防止」

- ①コシヒカリは目標茎数(下記参照)を確保したら中干しを実施する。
- ②中干しを効果的にするために溝切りを行う。
- ③中干し期間は土壌・気象条件等により異なるが、約7日間、田面に約2cmの亀裂を目安に行う。
- ④中干し後は徐々に入水し、その後は間断灌水にする。
- ⑤中干しは 幼穂形成始期(7月上旬頃)までには完了させる。

田植え機の設定が50株/坪の場合	・	・	茎数がおおよそ36本/株		
〃	60株/坪	〃	・	〃	30本/株
〃	70株/坪	〃	・	〃	26本/株

#### (2) 追肥 (カリ施用と窒素施用)

【カリ施用：出穂前40～35日(6/25～7/5頃)に行い、遅くとも中干し終了前に実施する。】

カリ入り肥料名	10a 当たり散布量	施用時期	カリ成分施用量
塩化カリ	7～10kg/10a	出穂35日前	4.2～6.0kg/10a
ケイ酸カリ	21～30kg/10a	出穂40日前	4.2～6.0kg/10a

※ケイ酸：この時期に施用し稲体の受光体勢を良くすることで、群落の光環境を改善が図られ、食味向上の効果がある。

【窒素施用：コシヒカリはN成分で1.5kg程度、ひとめぼれ等はN成分で2kg程度施用】

幼穂長	出穂前	生育ステージ	穂肥時期
0.1cm	25日	幼穂形成始期 (止葉抽出)	ふくひびき(7月3日～7日) ひとめぼれ(山間部で7月10日～14日)・天のつぶ(7月10日～15日)
0.2cm	21日		
1.0cm	18日		
2.0cm	15日	減数分裂期	コシヒカリ(7月24日～28日)
8.0cm	12日		

# ○農薬情報

## (1) 残草対策

ア. ヒエのみが残草した場合は、専用除草剤を使う。

除草剤名	使用量 (/10a)	使用時期及び方法 (ヒエのみに効果)	使用回数
クリンチャー1キログラム	1.5kg	移植後25日～ヒエ5葉期(収穫30日前まで)	2回以内

※除草剤散布後7日間は止め水する。

イ. クログワイ、オモダカ、シズイなどは塊茎を形成する雑草が残った場合。

除草剤名	使用量 (/10a)	使用時期及び方法 (ヒエ以外に効果)	使用回数
バサグラン粒剤(ナトリウム塩)	3~4kg	移植後15~55日(収穫60日前まで) 落水またはごく浅く湛水して散布。	1回
グラスジンMナトリウム粒剤	3~4kg(壤土~埴土) 3kg(砂壤土)	有効分げつ終止期~幼穂形成期前(収穫60日まで)。 落水散布。	1回

\* 散布後3~5日間はそのままの状態を保ち入水、落水かけ流しはしない。また、散布後降雨があっても強制落水しない。

## (2) いもち病の防除

①常発地帯において箱処理剤で「いもち病」の対策をとっていない場合は、対策を検討する。

発生症状	農薬名	使用量 (/10a)	使用時期及び	使用回数
葉いもち(発生前)	オリゼメート粒剤	3~4kg※1	初発の10日前~初発時(収穫14日前まで)	2回以内
葉いもち(発生後)	ブラシン粉剤 DL	3~4kg	収穫7日前まで	2回以内
穂いもち	コラトップ粒剤5	3~4kg※1	出穂30~5日前まで※2	2回以内

※1: 3~5cmの湛水状態で均一に散布し、散布後7日間は止水する。

※2: 穂いもち対象の粒剤は、出穂15~10日前(例:コシヒカリで7月24日~28日)に散布する。

## (3) 紋枯病、稲こうじ病、穂枯れ(ごま葉枯病菌) 「常発地帯では必ず防除」

①紋枯病の第一次伝染源は、前年度被害株に形成された菌核のため、前年度に発生が多く、被害の出たほ場では防除する。

②稲こうじ病は、穂ばらみ期に感染するため、穂ばらみ期から出穂期にかけて低温で日照不足、降雨が多い年は、発生が多くなる。

病名	薬剤名	使用量 (/10a)	使用時期及び方法	使用回数
稲こうじ病	Zボルドー粉剤 DL	3~4kg	出穂10日前まで(8/1頃まで)	-
紋枯病、 稲こうじ病、	モンガリット粒剤	3~4kg	出穂21~14日前(7/20~27) 収穫45日前まで	2回以内

※出穂期は、8/10頃を想定した。

※Zボルドー粉剤 DL は、葉が濡れている場合は薬害が出やすいので、散布に注意する。

## (4) 斑点米カメムシ防除

①イネ出穂後の草刈りは、水田にカメムシを呼び込むので、出穂10日前には草刈りを終わらせる。

②薬剤防除は穂揃期防除を基本とし、その後も発生が見られる時は、2回目の防除を実施する。

③ミツバチを放飼している地域は、十分注意して使用する。

